Japanese Journal of Applied Psychology
2024, Vol. 50, No. 2, 110-120

原　著

幼児の社会性を多角的視点から評価する
―3歳児を対象にした保護者と保育者の比較及び行動観察との関連―[1)]

菊 地 一 晴*・相 良 順 子**

Evaluating the Social Skills of Children from Multiple Evaluators: Comparison of Parents and Childcare Workers and Relationship between Behavioral Observation for 3-Year-Old Children

Katsuharu KIKUCHI* and Junko SAGARA**

In this study, we evaluated children's sociability from the multifaceted perspectives of children's parents, childcare workers, and authors, and conducted exploratory research on the characteristics and relationships of the evaluation results. There was a partial correlation between the results of childcare workers' evaluations based on questionnaires and the results analyzed by the authors based on behavioral observations of the children. (1) Extraversion who invites other children to play and plays while having conversations; (2) Internalizing problems with little interest in other children and a relatively long time spent playing alone. On the other hand, no relationship was found between the evaluation results of parents and childcare workers, or between parents and the authors. This study suggested that children express different behaviors at home and at nursery school, suggesting the significance of evaluation by multiple raters.

key words: sociality, multi-informants, 3-year-old, caregiver, comparative study

問題と目的

社会性とは，広義には「人間が人間社会の中で安全にしかも適応的に生きていくためのあらゆる能力や特性（繁多，1995）」であり，狭義には「他者との円滑な対人関係を営むことができるという対人関係能力（繁多，1991）」を指す。社会性は出生から成人になるまでに育まれ，子どもが成長するそれぞれの年齢で家庭や保育所，学校等の様々な場での人間関係と社会的な経験を通じて発達するものである（鶴・安藤，2007）。

昨今，我が国における子どもたちは家庭での養育

1) 本研究は科学研究費事業の助成を受けた研究の一部である（課題番号 22K02387）。
* 聖徳大学大学院児童学研究科
Major in Child Studies, Seitoku University Graduate School, 550 Iwase, Matsudo-shi, Chiba 271-8555, Japan.
（kikuchi.katsuharu@wa.seitoku.ac.jp）
** 聖徳大学教育学部
Department of Education, Seitoku University, 550 Iwase, Matsudo-shi, Chiba 271-8555, Japan.

のほか，保育所等で集団生活を送ることが一般的であり（内閣府，2018），「子どもの社会性を評価する」ということは家庭内の様子だけでなく，保育所等も含めた日常的に生活を送る環境の中で対象児を見ることが必要となる。そのため子どもの社会性を評価する場合，保護者の視点による評価と子どもを養育する保育者や教師の視点からの評価が不可欠となる。こうした対象者に関する情報を複数の情報提供者から収集し，それらを総合的に評価・検討するMulti-Informant によるアプローチは臨床心理や精神医学の分野で広く使用されており，近年では発達領域においてもその有効性が指摘されている（Kerr et al., 2007）。しかし，子どもの社会性に関連した先行研究では，保育者のみによる評価（e.g.，矢嶋ほか，2000），あるいは子どもに対する観察や実験から得た反応及び行動のみに依拠した報告（e.g.，加藤ほか，2012）に偏在し，保護者を含めた検討は今なお非常に少ない。幼児の社会性に関連した機能の発達には，個人の資質及び，保護者等の外的要因からの影響がある（Eisenberg et al., 2003）ため，子どもの社会性を評価するには保護者のみ，あるいは保育者のみによる単一視点からの評価ではなく，対象児を養育する複数の視点から評価することが必要だと言える。

また，子どもの社会性を測定する場合，対象児の年齢は重要である。子どもの行動を根拠として評価することについて，直原ほか（2023）は，養育者等が子どもの行動を評価することが可能になるのは，一般的に子どもの年齢が2歳以降になった時期からとしている。また，児童期の社会性は乳幼児期など発達初期の行動が関連すること（菅原ほか，1999）や，攻撃性などの不適応行動は児童期以降の変容が困難であることが報告されている（Moffitt, 1993）。幼児期の中でも，とくに3歳児は社会性の萌芽期にあたり，2歳から3歳にかけて急激に仲間への関心が増え（Ellis ほか，1981），この頃の行動が児童期の社会性を予測する可能性が高い。一般的に2歳頃は，ひとり遊びや傍観的行動が多くみられる時期であり，それが3歳にかけて並行遊びへと移行し，徐々に他児と関わる行動や機会が増加していく。直原ほか（2023）は，3歳時点の外在化問題が，その後7歳までの向社会的行動へ負の効果を及ぼすことを明らかにしており，3歳齢は，後の問題行動を予測する重要な時期として注目されている。

複数の評価者によって評価することの必要性

前述したように，子どもの社会性を評価する場合，対象児を取りまく複数の養育者の視点から評価することが必要である。しかしながら，これまで保護者と保育者の両方の視点から同一対象児を評価し，その結果について比較検討した研究はわずかであり，先に述べた直原（2023）は，保護者のみを対象に調査を実施しており，保育者を含めた複数の養育者から子どもを見た検討ではなかった。

複数の評定者によって子どもの社会性に関連して評価した数少ない先行研究を見てみると，たとえばBohlin ほか（2000）は，乳幼児期の安定した愛着は，後の社会的スキルを促進するというリサーチクエスチョンのもと，子どもの保護者と担任教師による他者評価，そして児童本人に対する自己評価，さらに著者らによる行動観察という多角的な視点から縦断的な検討を行っている。その研究では，保護者と担任教師は向社会性や内向性という概念に関して対象児を同様に評価（$.35 < r < .49$）した一方，対象児の主体性，1人遊びという概念は，著者らによる行動観察と児童本人による自己評価間に関連がないことを伝えている。また Abdi（2010）は，幼稚園等に在籍する子どもの保護者と保育者を対象に，幼児の社会的スキルや問題行動に関する認識について検討し，養育者間の評価結果は符合することを伝えている。

一方国内では，森田・藤井（2012）が子どもの諸発達（運動・言語・社会性）に対する保護者と保育者の認識について検討を行い，運動と言語に関しては保育者よりも保護者の得点が高く，社会性については保護者よりも保育者の方が得点を高く評価するという養育者間の認識の違いを報告している。さらに菊地・相良（2022）は，保育所在園児の保護者と担任保育者を対象に，子どもの愛着に関する評価結果について比較検討を行い，保護者は保育者よりも子どもとの愛着関係を高く評価するという評定者による結果の違いを伝えている。

このように，子どもの社会性に関する先行研究において養育者間の評価結果は必ずしも一致するものではなく，さらに保護者や保育者といった評価者による結果の違いや特徴からも，複数の視点から評価することの重要性を指摘することができる。以上のことから，本研究では複数の視点を，保護者，保育者として子どもを評価することとした。また，保護者や

保育者という日常的に子どもと対峙している養育者による評価は認知の偏りが混入しやすく，正確さの面では劣る(坂上ほか，2016)ため，妥当性についての課題が懸念される。そのため，筆者らが保護者と保育者とは独立した立場から子どもの行動観察を通じた評価を実施し，それぞれの評価結果を比較検討することによって，「子どもの社会性を多角的視点から評価する」という問いに対する結果の妥当性が高められると考える。

複数の研究方法を使用することの重要性

次に，複数の方法を使用して検討することの必要性について述べる。子どもを評価した先行研究を参照すると，加藤ほか(2012)は，集団生活の中における幼児の社会性について観察法を使用した検討を行っている。その報告では，豊富な観察データから子どもの対人評価が幼児期に出現することを明らかにしているが，この研究は単一方法によるものであり，複数の方法による検討ではなかった。観察法はデータ収集時の自由度が高く，目の前で起きているすべての出来事を蓄積することが可能な反面，会話や行動，判断等を観察データから読み取ることは困難であり，そうした行動等が出現した背景にある対象児の動機や資質を検討するうえでは十分ではない（塩崎，2011)。また，質問紙調査法の結果のみに依拠した検討についても，いくつかの問題がある。質問紙調査は大量のデータ収集が比較的短時間のうちに行えるという利点がある一方，回答には評定者の気分や感情が含まれる可能性があり，そうした反応バイアスが出現した場合，結果に影響を与えることが指摘されている(吉田，1995)。こうした指摘から，近年では，それぞれの研究法の特性や強みを活かし，互いの弱点を補足するような複数の方法論による検討の大切さが問われている（尾見，2011)。

本研究の目的

以上をふまえ，本研究は保育所等で集団生活を送る3歳児を対象に複数の視点と方法から社会性に関する評価を実施し，その結果に対する検討を行う。

これまで，子どもの社会性を評価した先行研究では，保護者と保育者という複数視点による評価結果の安定性について明確な結論は見出されていない。そのため，保護者と保育者がそれぞれ子どもの社会性をどのように見ているのかについて，その詳細を明らかにすることは，発達心理学領域へひとつの知見を提供するものとして意義がある。さらに，これまで複数の研究方法から同一対象児を評価した先行研究は非常に少ない。こうした一連の理由から，本研究は3歳児の社会性に焦点をあて，保護者と保育者，そして筆者らが同一対象児を質問紙法や観察法，面接法によって評価し，その結果の共通性と特徴について探索的に検討することを研究の目的とする。

方　　法

本研究では，複数の視点から子どもの社会性を評価するという観点に基づき，保護者を対象とした質問紙調査，保育者を対象とした質問紙調査と半構造化面接調査，そして筆者らは保育所等で生活する子どもの行動観察からデータを収集した。

調査対象

本研究は，施設長の使用許可を得たA県内の2施設(B保育所，C認定こども園)を対象施設とした。対象施設に在籍する3歳児クラス（B保育所2クラス，Cこども園2クラス，計4クラス)の園児の保護者に調査協力への同意を求め，同意が得られた子ども37名（平均月齢46か月，$SD = 3.44$）とその保護者及び，対象児の担任保育者4名を調査対象者とした。なお担任保育者は，自身が担任するクラスの子どもに対して回答を行った。

倫理的配慮

研究協力施設の長に対し，対面によるインフォームドコンセントを実施し，施設の使用許可を得たうえで，すべての調査を開始した。その後，在園児の保護者と研究協力施設の保育者に対してもインフォームドコンセントを行い，依頼文書を配布した。依頼文書には，調査内容・実施方法等のほか，匿名性を遵守する個人情報の保護及び，調査への参加は自由意志かつ，調査期間内であれば随時撤回可能である旨を記載した。とくに観察法による撮影については，同意を得ていない子どもの映像を分析に使用しないことを強調した。本研究は，書面での承諾(同意)を得た保護者と園児，保育者を対象に実施した。本研究は，第一筆者及び第二筆者が所属する大学の倫理審査を受け承認された（承認番号：2019U043)。

調査内容

質問紙調査　調査は，2022年7月から8月にかけて実施した。37名の子どもの保護者及び，対象児が在籍する各クラス担任4名(平均保育歴16.25年，*SD*

= 4.09）に対して，子どもの社会的行動に関する質問紙を配布，回収した。保護者から25名分（回収率67.57％），保育者からは37名全員分の回答を得た。

質問項目は，顕在化した行動特性から子どもの社会性を評価するという観点で，次の内容について尋ねた。主張スキル等の子どもの外向性，周囲への関心の程度を評価する内在化問題，攻撃性等を評価する外在化問題に関する項目によって質問紙を構成した。使用した尺度は，幼児用社会的スキル尺度（金山ほか，2011）と幼児の問題行動尺度（金山ほか，2006）を使用した。幼児用社会的スキル尺度の「主張スキル」及び，幼児の問題行動尺度の「内在化問題行動」と「外在化問題行動」から，因子負荷量.50以上の項目を使用し，主張スキル7項目，内在化問題行動5項目，外在化問題行動8項目，計20項目の質問紙を作成した。なお，本研究においては，社会的スキルを「外向性」，内在化問題行動を「内在化問題」，外在化問題行動を「外在化問題（攻撃性）」「外在化問題（多動性）」と表記する。質問紙への回答は「1．まったくみられない」から「5．非常によくみられる」の5件法で求めた。

行動観察　観察は，2022年7月から9月にかけて実施した。月1～2回の頻度で調査協力施設を訪問し，対象児が自身の興味に応じて活動を選択できる自由遊び中の子どもの様子を記録した。カメラは1台で定点観察を行い，可能な場合には予備的にさらに1台を手持ちで撮影した。撮影時間は1回の訪問あたり，およそ120分間であった（B保育所：4回の訪問で約480分，C認定こども園：5回の訪問で約600分，合計およそ1,080分）。

記録された映像から，対象児の行動が測定可能な分析用データを抽出した。分析用データは5分間を一単位とし，対象児1人あたり6回分，計30分（合計1,110分）を分析対象とした。分析対象時間の根拠としては，幼児の行動分析研究が頻繁に報告されている日本発達心理学会の学会誌「発達心理学研究」を参照した。2000年から2019年に発行された「発達心理学研究」のうち，ビデオ記録を用いた観察法研究83編から，ビデオ映像を記録のみに使用したもの（e.g.，北田，2016）や，具体的な総録画時間が不明なもの（e.g.，柳岡ほか，2018），さらに，1/0サンプリング法や事象見本法のように特定行動の生起頻度測定のみに使用した研究を除いた17編の先行研究を集計した結果，平均記録時間は683分であり，本研究で分析に使用した映像は十分な観察時間を確保していると考えた。分析用データはRubin（1982）の遊びの観察尺度（POS）や，会話中の幼児の行動について検討した菊地・相良（2018）の行動分析カテゴリを参照し分析を行った（Table 1）。

半構造化面接調査　調査は，2022年9月に実施した。質問紙調査同様，対象児が在籍するクラスの保育者4名を対象者として半構造化面接を実施した。

インタビューガイドは，質問紙調査で尋ねた項目をもとに作成した。外向性については幼児用社会的スキル尺度の項目から，「自分から友だちを誘って遊ぶことが多い子はいるか，いないか」，内在化問題については幼児の問題行動尺度の項目から，「友だちと遊ぶよりも，1人でじっくりと遊ぶことが好きな子はいるか，いないか」，外在化問題は幼児の問題行動尺度の中から，「友だちとケンカすることが目立つ子はいるか，いないか（攻撃性）」「落ち着きがない子はいるか，いないか（多動性）」を尋ねた。4名の保育者に1人ずつ面接を行い，各質問に対する肯定的な発話の中で挙がった個人を「言及あり」としてカウントし，名前が出なかったそれ以外の対象児を「言及なし」としてカウントした。面接時の会話については，全てのインタビュイーから許可を得て録音した。面接時間は1人あたりおよそ30分（M = 30.00 min，SD = 7.07）で，各協力施設の空き室を使用して個別に実施した。面接内容は録音データを基に逐語録を作成した。本研究では外向性・内在化問題・外在化問題について，保育者から名前が挙がった子どもか否かという情報を分析に使用した。

結　　果

今回の研究では，尺度水準の異なるデータによる比較検討を行うため，収集したデータを次のように定義し分析を実施した（Table 1）。

質問紙調査の項目を基準として，行動分析の外向性に関しては，質問項目の「自分から仲間との会話をしかける」「友だちをいろいろな活動に誘う」を「話しかけ（回数）」というカテゴリ名とし，質問項目の「指示しなくても，遊びや活動の集団に加わる」「ゲームや集団活動に参加する」を「複数遊び（時間）」というカテゴリ名，そしてこれら4つの質問項目を「主張スキル（会話時間）」というカテゴリ名に設定した。

Table 1　分析のためのデータ対応表と行動分析カテゴリの定義

質問紙調査	行動分析		半構造化面接
質問項目	カテゴリ名（単位）	具体的行動	インタビューガイド
外向性			
1 自分から仲間との会話をしかける 2 友だちをいろいろな活動に誘う	話しかけ（回数）	対象児から他者（他児，保育者等）への言語的働きかけが生起した回数（菊地・相良，2018）。	「自分から友だちを誘って遊ぶことが多い子はいるか，いないか」
3 指示しなくても，遊びや活動の集団に加わる 4 ゲームや集団活動に参加する	複数遊び（時間）	並行遊びではなく，他者との会話を伴った遊びや，同一の対象物を操作している時間。さらに，会話がない場合であっても，同じ遊びやモノを共有したり，身体活動等による交流が生起していた時間。会話を伴う複数遊びの場合は，「主張スキル（会話時間）」にも重複してカウントした。	
5 1-4 をまとめたもの	主張スキル（会話時間）	他者（他児，保育者等）と言葉でコミュニケーションしている時間。	
内在化問題			
6 仲間との遊びに参加しない 7 ひとり遊びをする	1 人遊び（時間）	何らかの対象（玩具等）を完全に 1 人で操作している時間。POS（Rubin，1982）の「Solitary」に相当。	「友だちと遊ぶよりも，1 人でじっくりと遊ぶことが好きな子はいるか，いないか」
外在化問題			
8 人や物に攻撃的である 9 他の子どもと口論する	攻撃性（回数）	対象児から他者（他児，保育者等）への不快感や怒りを示した回数。POS（Rubin，1982）の「Aggression」と同義。	「友だちとケンカすることが目立つ子はいるか，いないか」
10 そわそわしたり，落ち着きがない 11 注意散漫である	多動性（移動回数）	従事していた活動から別の活動への移動が確認できた回数。POS（Rubin，1982）の「Transition」に相当。	「落ち着きがない子はいるか，いないか」

行動分析の内在化問題は，質問項目の「仲間との遊びに参加しない」「ひとり遊びをする」を「1人遊び（時間）」というカテゴリ名に設定した。行動分析の外在化問題は，質問項目の「人や物に攻撃的である」「他の子どもと口論する」を「攻撃性（回数）」，「そわそわしたり，落ち着きがない」「注意散漫である」を「多動性（移動回数）」というカテゴリ名に設定した。半構造化面接は，先に示したように質問紙調査の項目から外向性，内在化問題，外在化問題に関するインタビューガイドを作成した。こうして尺度水準の異なるデータを対応させ，分析を実施した。統計解析にはR-4.2.1を使用した。

質問紙調査

下位尺度ごとのα係数を算出した結果，保護者と保育者はそれぞれ，主張スキル α= .82，α= .90，内在化問題行動 α= .61，α= .81，外在化問題行動 α= .64，α= .88であった。保護者の内在化問題行動と外在化問題行動の評価結果は，いずれも十分な内的整合性の高さは示されなかったが，全体的に許容できる数値が得られたため，そのまま分析を行った。

行動観察

本研究では同意を得た37名の子どものうち，保護者から質問紙調査の回答が得られた25名分（合計750分）を基に測定と分析を実施した。測定にはQ'sfix社の行動コーディングシステムBECO 2を用いた。測定は無作為に選択された全体の記録映像の内，約20%のデータに対し，筆者2名と発達心理学を専攻する大学院生1名の計3名によって進めた。その結果，第一筆者との一致率は κ= 0.68であり，その値は十分高いものであると考えられた。不一致の箇所については協議を行い，より適切と考えられるものに決定した。

半構造化面接

逐語録データを基に，面接の中で得られた下位概念ごとに子どもを「言及あり」群と「言及なし」群に分類した。保育者から発言された言及あり群は対象児25名のうち，外向性の高さについて7名，内在化問題の高さについて9名，攻撃性の高さについて7名，多動性の高さについて4名であった。

複数の視点と研究法による評価結果の関連性

保護者と保育者による質問紙調査結果と筆者らによる行動分析結果の相関関係をTable 2に示す。外向性に関する保育者と筆者らの評価結果間のすべての下位概念に弱い相関から中程度の相関係数が確認された。このことから，対象児の外向性について，保育者と筆者らが同じように評価していることが示された。外向性に関して，保護者と保育者，保護者と筆者らの間に相関は確認されなかった。内在化問題については，保育者と筆者らの評価結果間に相関がみられたが，保護者と保育者間に関連性は確認されなかった。外在化問題については，攻撃性と多動性の2つの下位概念に関して，3者間のいずれの場合においても関連性はみられなかった。

相関分析の結果，保育者と筆者らの間の相関が高く，保護者との関連性は確認されなかったことから，さらに検討を行った。まずは保護者と保育者の評価の特徴を比較するため，下位概念ごとにそれぞれの評価結果を対にしたデータセットを作成し，対応のある t 検定を実施した（Table 3）。その結果，内在化問題の1人遊びと外在化問題の多動性に関して，保護者は保育者より高く評価することが示された。

次に，保育者と筆者らの相関関係をより具体的に検討するため，保育者に対して実施した半構造化面接のデータを使用し分析を行った。面接による保育者の言及と行動観察及び，質問紙調査との関連性を検討するため，半構造化面接の結果から下位概念ごとに分類した「言及あり」群と「言及なし」群を目的変数，行動分析及び質問紙調査結果を説明変数として，Mann-WhitneyのU検定を実施した（Table 4-1，2，3）。Table 4-1は外向性に関する言及について，Table 4-2は内在化問題に関する言及について，Table 4-3は外在化問題の攻撃性と多動性，それぞれに対する言及の有無について類型化したものである。

目的変数と行動観察との関係を見てみると，外向性に関して，外向性言及あり群は，言及なし群と比較し，会話時間が長く（$U = 32.00$，$z = 1.85$，$p = .063$，$r = .37$），移動回数が少ない傾向（$U = 31.50$，$z = 1.89$，$p = .054$，$r = .38$）が示された。また，内在化問題に関する言及あり群は，言及なし群と比較し，複数で遊ぶ時間や会話時間が有意に短く（それぞれ $U = 29.00$，$z = 2.41$，$p = .015$，$r = .48$；$U = 25.00$，$z = 2.63$，$p = .007$，$r = .53$）移動回数が多い傾向（$U = 40.50$，$z = 1.77$，$p = .072$，$r = .36$）が示された。内在化問題については，保育者評定による質問紙調査結果と筆者らによる行動観察の間に相関関係が示されていたが，半構造化面接結果と行動観察の間には有

Table 2　保護者・保育者・筆者らによる評価結果の相関（$n = 25$）

	話しかけ	*M*	*SD*	*Range*	Var1	Var2	Var3
外向性	1. 質問紙（保護者）	3.64	0.77	[2.00 - 5.00]	—	.17	− .03
	2. 質問紙（保育者）	3.94	0.82	[2.00 - 5.00]		—	.42*
	3. 行動観察	7.72	4.87	[0.00 - 19.00]			—
	複数遊び						
	1. 質問紙（保護者）	3.50	0.60	[2.00 - 4.50]	—	.01	.16
	2. 質問紙（保育者）	3.86	0.77	[2.00 - 5.00]		—	.35†
	3. 行動観察	191.69	152.32	[9.37 - 571.96]			—
	主張スキル						
	1. 質問紙（保護者）	3.57	0.59	[2.00 - 4.50]	—	.10	.21
	2. 質問紙（保育者）	3.90	0.69	[2.50 - 5.00]		—	.54**
	3. 行動観察	91.99	81.99	[1.53 - 309.54]			—
内在化問題	1 人遊び						
	1. 質問紙（保護者）	3.60	0.94	[1.00 - 5.00]	—	− .21	.02
	2. 質問紙（保育者）	2.52	0.99	[1.00 - 4.00]		—	.46*
	3. 行動観察	598.64	242.28	[296.06 - 1378.12]			—
外在化問題	攻撃性						
	1. 質問紙（保護者）	2.48	0.90	[1.00 - 4.00]	—	− .15	− .14
	2. 質問紙（保育者）	2.00	0.89	[1.00 - 4.00]		—	.26
	3. 行動観察	2.76	5.96	[0.00 - 30.00]			—
	多動性						
	1. 質問紙（保護者）	2.60	0.85	[1.00 - 4.00]	—	.16	− .12
	2. 質問紙（保育者）	2.08	0.85	[1.00 - 4.00]		—	− .08
	3. 行動観察	4.60	2.67	[0.00 - 10.00]			—

†$p < .10$,　*$p < .05$,　**$p < .01$

Table 3　保護者と保育者による各変数の記述統計量（$n = 25$）

	保護者		保育者		*t*	*d*
	M	*SD*	*M*	*SD*		
外向性						
話しかけ	3.64	0.77	3.94	0.82	1.31	.26
複数遊び	3.50	0.60	3.86	0.77	1.81†	.25
主張スキル	3.57	0.59	3.90	0.69	1.77†	.25
内在化問題						
1 人遊び	3.60	0.94	2.52	0.99	3.89***	.48
外在化問題						
攻撃性	2.48	0.90	2.00	0.89	1.85†	.26
多動性	2.60	0.85	2.08	0.85	2.13*	.29

†$p < .10$,　*$p < .05$,　***$p < .001$

意な差は確認されなかった（$U = 51.00$,　$z = 1.16$,　$p = .246$, $r = .23$）。外在化問題の言及の有無と行動観察との関係においては，特徴的な関連性は確認されなかった。

目的変数と質問紙調査との関係は，外向性，内在化問題，外在化問題（攻撃性）の下位カテゴリ間に有意差がみられた。具体的には，外向性言及あり群は言及なし群と比較し，外向性得点が有意に高く，内在化問題言及あり群は言及なし群と比較し，内在化問題得点が有意に高いことが示された。外在化問題の攻撃性と多動性の言及あり群はそれぞれの言及なし群と比較し，攻撃性の得点が有意に高かった。

考　　察

本研究の目的は，3 歳児の社会性に焦点をあて，保護者・保育者及び，筆者らの行動観察という多角的視点から同一対象児を評価し，結果の共通性や特徴について探索的に検討することであった。ここではその結果をもとに考察する。

評価者による結果の特徴と関連性

本研究の結果から，3 歳児の外向性と内在化問題の一部について，評定者による評価の特徴と関連性が示された。保育者による主観的な評価と筆者らの観察による評価結果間では，本研究で外向性の下位概念とした，話しかけ，複数遊び，主張スキル及び内

Table 4-1　半構造化面接類型別統計量（外向性）

外向性	半構造化面接 言及あり（$n=7$）		半構造化面接 言及なし（$n=18$）		U	r
	M	SD	M	SD		
行動観察						
外向性						
話しかけ（回数）	9.71	(4.13)	6.94	(4.92)	43.50	0.23 ☆
複数遊び（時間）	258.49	(153.23)	165.72	(143.82)	38.00	**0.30** ☆
主張スキル（会話時間）	**145.29**	(102.58)	**71.26**	(66.99)	**32.00**†	**0.37** ☆
内在化問題						
1人遊び（時間）	570.70	(184.47)	609.50	(260.52)	60.00	0.03
外在化問題						
攻撃性（回数）	2.29	(1.98)	2.94	(6.90)	47.50	0.19
多動性（移動回数）	**2.86**	(1.88)	**5.28**	(2.62)	**31.50**†	**0.38**
質問紙調査						
外向性	**4.27**	(0.43)	**3.57**	(0.70)	**28.00****	**0.43** ☆
内在化問題	2.00	(0.76)	2.72	(0.99)	38.00	**0.31**
攻撃性	2.00	(1.07)	2.17	(0.90)	54.50	0.10
多動性	2.14	(0.64)	2.06	(0.91)	55.50	0.09

†$p<.10$，**$p<.01$
注1．太字は有意差（有意傾向）が見られた箇所を示す
注2．☆は外向性に該当する項目を表す

Table 4-2　半構造化面接類型別統計量（内在化問題）

内在化問題	半構造化面接 言及あり（$n=9$）		半構造化面接 言及なし（$n=16$）		U	r
	M	SD	M	SD		
行動観察						
外向性						
話しかけ（回数）	6.00	(3.68)	8.67	(5.18)	50.00	0.24
複数遊び（時間）	**105.68**	(72.71)	**254.58**	(154.01)	**29.00***	**0.49**
主張スキル（会話時間）	**33.23**	(30.73)	**116.34**	(86.94)	**25.00****	**0.54**
内在化問題						
1人遊び（時間）	645.92	(172.74)	572.05	(270.13)	51.00	0.23 ☆
外在化問題						
攻撃性（回数）	4.00	(9.21)	2.06	(2.51)	66.00	0.07
多動性（移動回数）	**5.89**	(2.51)	**3.87**	(2.47)	**40.50**†	**0.36**
質問紙調査						
外向性	3.43	(0.68)	3.96	(0.65)	45.00	0.30
内在化問題	**3.22**	(0.79)	**2.13**	(0.86)	**28.00*****	**0.51** ☆
攻撃性	2.44	(1.07)	1.94	(0.83)	53.00	0.22
多動性	2.22	(1.13)	2.00	(0.61)	69.00	0.03

†$p<.10$，*$p<.05$，**$p<.01$，***$p<.001$
注1．太字は有意差（有意傾向）が見られた箇所を示す
注2．☆は内在化問題に該当する項目を表す

在化問題について関連性が確認された。先行研究からは，保育者は子どもと瞬間的，無意識的に関わりながら子どもを判断する（e.g.，浜口，2014）と言われていたが，筆者らの観察による評価結果との関連性は，保育者が集団の中でも子ども1人ひとりの行動傾向を客観的に捉えていることを示唆するもので

Table 4-3　半構造化面接類型別統計量（外在化問題）

外在化問題（攻撃性）	半構造化面接 言及あり（$n=7$）		言及なし（$n=18$）		U	r
	M	*SD*	*M*	*SD*		
行動観察						
外向性						
話しかけ（回数）	8.57	(4.78)	7.39	(4.87)	58.00	0.06
複数遊び（時間）	209.89	(163.34)	197.51	(142.83)	61.00	0.02
主張スキル（会話時間）	92.36	(92.72)	84.11	(77.71)	59.00	0.04
内在化問題						
1人遊び（時間）	587.58	(158.91)	602.94	(267.66)	61.00	0.02
外在化問題						
攻撃性（回数）	5.13	(9.52)	1.65	(2.37)	57.00	0.18 ☆
多動性（移動回数）	4.86	(3.23)	4.50	(2.41)	62.50	0.01
質問紙調査						
外向性	3.80	(0.66)	3.75	(0.73)	55.00	0.09
内在化問題	2.57	(0.90)	2.50	(1.01)	59.50	0.04
攻撃性	**3.00**	(1.00)	**1.71**	(0.57)	**24.00*** **	**0.57** ☆
多動性	2.57	(1.05)	1.89	(0.66)	41.00	0.29

外在化問題（多動性）	言及あり（$n=4$）		言及なし（$n=21$）		U	r
	M	*SD*	*M*	*SD*		
行動観察						
外向性						
話しかけ（回数）	7.25	(6.22)	7.81	(4.56)	34.50	0.11
複数遊び（時間）	309.35	(188.91)	180.34	(130.22)	26.00	0.23
主張スキル（会話時間）	149.84	(105.43)	74.34	(70.92)	24.00	0.26
内在化問題						
1人遊び（時間）	533.58	(214.89)	611.03	(245.21)	33.00	0.13
外在化問題						
攻撃性（回数）	3.50	(3.77)	2.62	(6.28)	36.50	0.08
多動性（移動回数）	2.75	(2.05)	4.95	(2.63)	21.50	**0.30** ★
質問紙調査						
外向性	3.96	(0.55)	3.73	(0.73)	35.50	0.09
内在化問題	2.25	(1.09)	2.57	(0.95)	33.50	0.13
攻撃性	**3.00**	(0.71)	**1.95**	(0.90)	**16.00***	**0.41**
多動性	2.50	(0.50)	2.00	(0.87)	25.00	0.27 ★

*$p<.05$,　***$p<.001$
注1.　太字は有意差（有意傾向）が見られた箇所を示す
注2.　☆は攻撃性に該当する項目，★は多動性に該当する項目を表す

あった。子どもの外向性を評価することについて，保育者と筆者らの結果は部分的に類似する特徴をもつという本研究の結果は，保育者が担任として子どもの社会性の一部を主観的にも客観的にも的確に捉えられていることを実証したものであり，このことを保育者が自認し，子どもと保護者に向き合うための一助になることを期待する。

ただし，外在化問題として保育者が言及した子どもの特徴と，筆者らが評価した実際の子どもの行動との関連はみられなかった。本研究では，半構造化面接と質問紙調査との関連では，同一の保育者に対して実施したという制限はあるにせよ，攻撃性の分析結果には中程度以上の効果量が確認された（Table 4-3）。しかし，行動観察結果との関連性は認められず，保育所での3歳児の外在化問題行動を評価することの困難さが提起された。本研究における行動観察は，自由遊び場面の行動から分析を行った。子どもたちは自由に遊ぶ時間帯であったため，自身の興味

や関心をもとに行動しており，この撮影環境が今回の分析カテゴリにおける外在化問題の評価に影響した可能性がある。今回の観察は自由遊び場面に限定しており，他児との交流よりも物で遊ぶことを好む子どもや，長時間モニタリング（POSの「Onlooker」に相当；Rubin,1982）を行う様子などが映像記録から確認された。そのため他児への不快感を覚える情緒的交流まで達する機会が少なく，攻撃性カテゴリへ反映されないことが考えられた。また，「そわそわしたり，落ち着きがない」「注意散漫である」ことは，3歳児特有の行動であることが考えられ，そのことが多動性カテゴリへ反映されにくいことも示唆された。今後，観察法を使用して子どもの社会性に関する分析を実施する場合，すべての対象児にとって同質の条件を保証する撮影環境及び，対象児の年齢を考慮することの必要性も考えられた。藤崎・木原（2010）は，保育者は攻撃性など他児を巻き込む外在化問題行動を4・5歳児の発達課題として捉えると報告しており，本研究の対象児においては問題視されにくい年齢であることが考えられた。しかしながら，ここで示された課題は本研究結果から導出された観点であり，多角的な視点と研究方法からアプローチすることの重要性を示唆するものである。

一方，保護者と保育者間，保護者と筆者らの間の評価結果に関連性は確認されなかった。本研究で取り上げた子どもの社会性に関する指標では，内在化問題と外在化問題について保護者と保育者間の平均値の差が確認され，家庭内で子どもを見る保護者の視点と集団生活の場で子どもを見る保育者の評価は必ずしも一致するものではなかった。この保護者と保育者による評価の特徴から，子どもが家庭内と保育所では異なる行動や自己表現をしていることが考えられた。保育者は保護者よりも内在化問題と外在化問題を低く評価する傾向がみられており，これは，集団生活の場において子どもが自ら周囲の様子を判断して他児と関わったり，自己抑制機能を働かせながら衝動的な攻撃を制御することが出来ていることを示唆するものであろう。つまり本研究の結果は，「子どもの社会性を評価する」ことは，家庭内や保育所，あるいは保護者や保育者のいずれかに限定した評価では難しいという研究環境の在り方について，改めて問題提起するものとなった。また保護者には，子どもの家庭での問題行動について過剰な不安から叱責を与えるのではなく，保育者と子どもを信頼し，家庭と保育所等で協同することの必要性を提案することができよう。

本研究の課題と展望

本研究は，保育者による半構造化面接と保育者と保護者による質問紙調査，そして筆者らによる行動分析のデータを基に3歳児の社会性について検討し，多角的視点から子どもを評価することの重要性を示すことができた。この結果は，問題と目的で提起した，評価者によるバイアス混入の課題及び，単独の研究方法では不十分であるという指摘を一部支持するものであった。

しかし，課題も残された。本研究での半構造化面接のデータは，保育者が認知する特徴的な子どもについて述べてもらい，子どもの名前が出たかどうかという単純な水準によるものであった。そのため今後は半構造化面接のトランスクリプトデータを使用した質的分析を進めていきたい。質的分析から導出された質的データと質問紙調査等の量的データを混成し検討を重ねることにより，近年発達領域で注目されている混合研究法への発展が期待できる。乳幼児の発達研究において混合研究法を適用することは，新たな知見の獲得と洞察を深めることに寄与し，応用心理や発達心理学の領域へ重要なエビデンスを提供することになるだろう。

引用文献

Abdi,B. (2010). Gender differences in social skills, problem behaviors and academic competence of Iranian kindergarten children based on their parent and teacher ratings. *Procedia Social and Behavioral Sciences*, *5*, 1175-1179. https://doi.org/10.1016/j.sbspro.2010.07.256

Bohlin,G., Hagekull,B., & Rydell,A. (2000). Attachment and social functioning: A longitudinal study from infancy to middle childhood. *Social Development*, *9*, 24-39. https://doi.org/10.1111/1467-9507.00109

Eisenberg,N., Zhou,Q., Losoya,H., Fabes,R., Shepard,S., Murphy,B., Reiser,M., Guthrie,I., & Cumberland,A. (2003). The relations of parenting, effortful control, and ego control to children's emotional expressivity. *Child Development*, *74*, 875-895. https://doi.org/10.1111/1467-8624.00573

Ellis,S., Rogoff,B., & Cromer,C. (1981). Age segregation in children's social interactions. *Developmental Psychology*, *17*, 399-407. https://doi.org/10.1037/0012-1649.1

7.4.399
藤崎 春代・木原 久美子 (2010).「気になる」子どもの保育．ミネルヴァ書房.
浜口 順子(2014)．平成期幼稚園教育要領と保育者の専門性．教育学研究，*81*, 448-459. https://doi.org/10.11555/kyoiku.81.4_448
繁多 進(1995)．社会性の発達を考える．二宮 克美・繁多 進（執筆代表），たくましい社会性を育てる（pp.1-17）．有斐閣.
繁多 進（1991）．社会性の発達とは．繁多 進・青柳 肇・田島 信元・矢澤 圭介（編），社会性の発達心理学（pp.9-16）．福村出版.
直原 康光・登藤 直弥・荒牧 美佐子・塩﨑 尚美・久保 尊洋・安藤 智子(2023)．幼児期後期から児童期後期の外在化・内在化問題，向社会的行動の経時的な相互関係――8 年間の縦断データを用いた交差遅延効果モデルによる発達カスケードの検討――．発達心理学研究，*34*, 208-218. https://doi.org/10.11201/jjdp.34.208
金山 元春・金山 佐喜子・磯部 美良・岡村 寿代・佐藤 正二・佐藤 容子（2011）．幼児用社会的スキル尺度（保育者評定版）の開発．カウンセリング研究，*44*, 216-226. https://doi.org/10.11544/cou.44.3_216
金山 元春・中台 佐喜子・磯部 美良・岡村 寿代・佐藤 正二・佐藤 容子(2006)．幼児の問題行動の個人差を測定するための保育者評定尺度の開発．パーソナリティ研究，*14*, 235-237. https://doi.org/10.2132/personality.14.235
加藤 真由子・大西 賢治・金澤 忠博・日野林 俊彦・南 徹弘 (2012)．2 歳児による泣いている幼児への向社会的な反応――対人評価機能との関連性に注目して――．発達心理学研究，*23*, 12-22. https://doi.org/10.11201/jjdp.23.12
Kerr, D., Lunkenheimer, E., & Olson, S. (2007). Assessment of child problem behaviors by multiple informants: A longitudinal study from preschool to school entry. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, *48*, 967-975. https://doi.org/10.1111/j.1469-7610.2007.01776.x
菊地 一晴・相良 順子（2022）.「子ども」に対する保護者と保育者の認識の違い――保護者のモバイルデバイスの使用と愛着評価に着目して――．チャイルドサイエンス，*24*, 35-39.
菊地 一晴・相良 順子(2018)．幼児期の視線の特徴と社会的スキルの関係――自由遊びの観察を通して――．聖徳大学児童学研究所紀要，*20*, 61-68.
北田 沙也加（2016）幼児期における物理概念の揺らぎ――あり得ない現象への認識と魔法との関連――．発達心理学研究，*27*, 212-220. https://doi.org/10.11201/jjdp.27.212
Moffitt, T. (1993). Adolescence-limited and life-course-persistent antisocial behavior: A developmental taxonomy. *Psychological Review*, *100*, 674-701. https://psycnet.apa.org/doi/10.1037/0033-295X.100.4.674
森田 愛子・藤井 真衣(2012)．幼児の発達への保護者と保育者の気づき，広島大学心理学研究，*12*, 269-277. https://doi.org/10.15027/34598
内閣府.（2018）. 令和元年版少子化社会対策白書第 2 章少子化対策の取組資料．Retrieved June 1, 2023 from https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2019/r01pdf
尾見 康博（2011）．研究パラダイムとの関係でみた研究法．日本発達心理学会(編)，発達科学ハンドブック研究法と尺度（pp.162-173）．新曜社.
Rubin,K. (1982). Nonsocial play in preschoolers: Necessarily evil?. *Child Development*, *53*, 651-657. https://doi.org/10.2307/1129376
坂上 裕子・金丸 智美・武田（六角） 洋子（2016）．片付け課題における 2 歳児の従順行動・不従順行動の経年変化――2004・2005 年度と 2010・2011 年度の比較から――．発達心理学研究，*27*, 368-378. https://doi.org/10.11201/jjdp.27.368
塩崎 尚美（2011）．研究パラダイムとの関係でみた研究法．日本発達心理学会(編)，発達科学ハンドブック研究法と尺度（pp.62-72）．新曜社.
菅原 ますみ・北村 俊則・戸田 まり・島 悟・佐藤達哉・向井 隆代 (1999)．子どもの問題行動の発達――Externalizing な問題傾向に関する生後 11 年間の縦断研究から――．発達心理学研究，*10*, 32-45. https://doi.org/10.11201/jjdp.10.32
鶴 宏史・安藤 忠(2007)．社会・家族の変化と子どもの社会性発達．神戸親和女子大学福祉臨床学科紀要，*4*, 61-70.
矢嶋 裕樹・齋藤 友介・中嶋 和夫（2000）．幼児の問題行動に関する因子構造モデルの検討．東京保健科学学会誌，*3*, 166-172. https://doi.org/10.24531/jjhs.3.3_166
柳岡 開地・津田 彩乃・西村 知沙(2018)．3 歳児のスクリプト獲得過程――“朝の用意”場面の短期的縦断観察を通して――．発達心理学研究，*29*, 84-94. https://doi.org/10.11201/jjdp.29.84
吉田 寿夫(1995)．学校教育に関する社会心理学的研究の動向――研究法についての提言を中心にして――．教育心理学年報，*34*, 74-84. https://doi.org/10.5926/arepj1962.34.0_74

（受稿: 2024.2.8; 受理: 2024.6.12）